ニカラグア密航計画

宮内勝典

ニカラグア密航計画

宮内勝典

KYOIKUSHA

ニカラグア密航計画
一九八六年十二月五日　第一刷

定　価　一五〇〇円
著　者　宮内勝典
発行者　高森圭介
発行所　株式会社　教育社
販　売　教育社出版サービス株式会社
〒一〇二　東京都千代田区富士見
二―十一―一〇　丸十ビル
電話〇三(二二六四)五四七七(代)

製　版　株式会社　ニチデン
印　刷　株式会社　日本制作センター
製　本　株式会社　大一製本

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN4-315-50424-6 ©宮内勝典1986

ニカラグア密航計画

目次

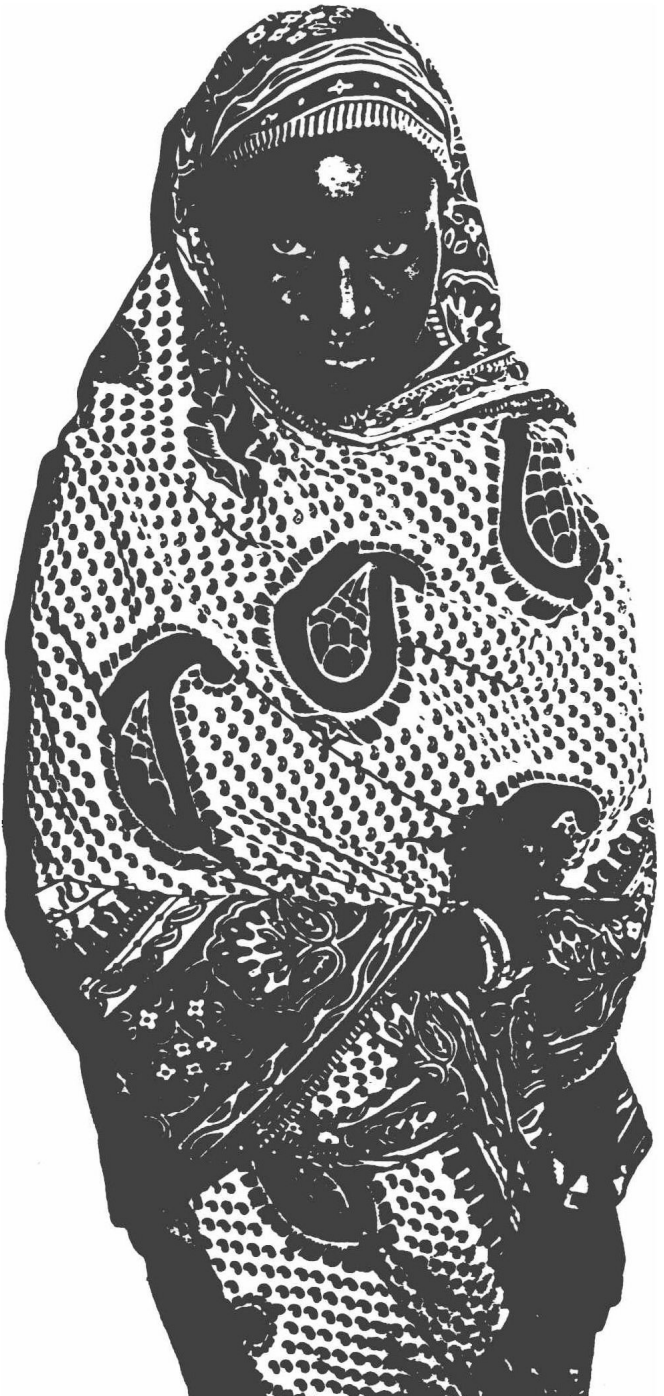
第1章 アフリカの日々 5
第2章 ケニアの夜・エチオピアの夜 27
第3章 地中海をまたぐ 49
第4章 モロッコの幻惑 73
第5章 ニューヨークの宇宙船ディスコ 97
第6章 前世の記憶をもつ少女 123

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第7章 ジャマイカの声 151
第8章 カリブ海通信 173
第9章 冒険の始まり 201
第10章 ニカラグア密航計画 229
第11章 密林のインディアン・ゲリラと 261
第12章 脱出の日 291

第1章

アフリカの日々



New York
Dakar
Lome
Lagos
Abidjan
Douala
Killimanjaro
Brazzaville

ニューヨーク出発

空港へ走る車のなか、砂漠を吹きわたる風のような音楽が流れていた。

ぎりぎりに張りつめたメロディが、宙を切り、砂粒のように飛んでいく。音の粒が、なまめかしく肌にぶつかってくる。

砂漠の青空が眼に浮かんだ。これから、そこへ行くのだ、旅が始まるのだ。記憶をたぐり耳を澄ましていると、突然、女たちの奇声が湧き起こった。胸を掻(か)きむしり、足のあいだから血をこぼしながら天へ言いつのるような叫び声だ。そうだ、ニンゲンに会いに行くのだ。

「もっとヴォリュームを上げてくれない？」

ドライバーに頼むと、カセットをいじりながら、

「これ好きですか？」

ふり返った顔はアラブ系の青年だった。髪が亜麻色なので気づかなかったのだ。

「回教徒(モスリム)なの？」

遠まわしに訊ねると、

「アフガンから来たんですよ」

「ああ、アフガニスタンなら行ったことあるよ、トラックの荷台に乗せてもらって砂漠を走ってたら知らないうちに国境を通り過ぎてしまって、ちょっと慌(あわ)てたな」

「ジャラーラーバードという町、知ってますか？」
「ペシャーワルに行く途中だろう」
「そう、そう、ぼくはそこで生まれたんですよ」
タクシー・ドライバーらしくない折り目のある話しぶりだった。学生かなと思って訊くと「アフガニスタンにいた頃は――」と言う。学生運動をやっていて、四年前ちょっとした用件でアメリカにやって来たのだが、近いうちに帰国するつもりだと言う。
「金、金、金、もううんざりですよ、この国には」
「いま帰ると、いろいろ危ないんじゃないか？」
「空港から入ると逮捕されるでしょうね」
「じゃ、どうやって？」
「パキスタンまで飛んで、それから国境を越えるつもりです」
「歩いて？」
「ええ」
「……」
陸路で中近東をよぎって行った以前の旅が憶いだされた。ヒッチハイクで東へ、東へ、と移動しながら、地球が骨折でもしたように赤い砂漠から露出している岩だらけの山脈を眺めていた。
ヒマラヤ山脈の西端が砂漠に没するあたりだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

パキスタンの国境にさしかかり、遮断機の前で行列しているとき、なにげなく頭上を見ると一人の老人がロバをひきながら岩山の尾根づたいに歩いて国境を越えようとしていた。
「カイバル峠のあたりだったら、わりと楽に越えられるかもしれないな」
「いや、いまはソビエト軍のヘリコプターが監視していて、見つかったら空から撃たれますよ」
「それでも帰るのかい？」
「叔父と兄が殺されたんです」
「……」
「母国（マザーランド）というのは、ほんとにオフクロみたいなもんだなあ。オフクロは一〇カ月間ぼくらを腹に入れてくれるけど、母国というのは二〇年、五〇年、七〇年も腹に入れてくれるもんな。みんなオフクロの乳を飲むみたいに母国の水を飲んできたんだ……」
ニューヨークの街を走るタクシーの中、互いになんの利害もない行きずりの他人だからこそ交わせる対話だった。いや、対話というより、ほとんど独り言であった。
イースト・リヴァーの川底トンネルをくぐり、高架式ハイウェイをひた走った。
マンハッタンの摩天楼が、光の密林となって聳（そび）えていた。夜空までが濃い赤紫色だ。
「死ぬなよ」
ぽつんと言うと、アフガニスタン人の青年はバックミラー越しにこちらを見た。独り言を聞いていた他人がいたことに気づいて驚いたような眼差（まなざ）しだ。

ケネディ空港に到着し、アフリカ航空のフロントで車を止めてもらった。
青年はもっと話したそうにもじもじしていたが、急に、ありあわせの紙切れに、
AHMAD TOKHI
と書いて差し出した。
「……」
ぼくはその紙切れをパスポート入れにしまいこんだ。
AHMAD TOKHI という名前を記憶すること、それだけが行きずりの他人であるぼくに託されたのだ。

アフリカ西端の岬

夜どおし大西洋上を飛びつづけ、夜明けに海が金色に染まった。
アフリカはまだ見えてこない。
翼が視界をさえぎり、ただ金色から青緑へ変化していく海面が見えるだけだ。じりじりしているうちに飛行機の高度が下がり、褐色の岩、アフリカ最西端の岬が目に飛び込んできた。
セネガルのダカールに到着。
滑走路のまわりに半砂漠が迫っていた。ささくれた赤い大地とブッシュ。荒涼とした風景だ。
滑走路の片隅には錆ついた古い飛行機が野ざらしになっていた。

ふっと、サン=テグジュペリのことを憶いだした。彼はこのアフリカ最西端のダカールを拠点として、南米への郵便空路を切り拓いたはずだった。ずっと以前、抱きしめるように読み返した『人間の土地』の一節を憶いだそうとするが、どうしても頭に浮かんでこない。うろ憶えだが、確かこんな意味だったような気がする。

――この大地は、無機物、鉱物の堆積にすぎないのか。それとも、そこで生まれ死んでいく人間のさまざまな夢が堆積している世界なのか。

象牙海岸

熱帯ジャングルが複雑に入りくんだ地形ぎりぎりまで繁り、その青緑色の途切れたところから泥色の海だ。

ギニア湾が鬱血したようによどんでいる。

対照的に、コートジボアールの首都アビジャンは「アフリカのニューヨーク」と言われるだけあって白い高層建築が林立し、熱帯雨林の水蒸気の中にぼうっと霞んでいる。さすがに暑い。まるでサウナ風呂だ。

毎日、汗まみれになって街をほっつき歩き、アフリカ黒人の美しさに目を瞠った。ニューヨー

クの黒人たちの抽象性、神経症的ないらだちとは打って変わり、存在の根から切り離されていない陽気さ、まっとうな伸びやかさが感じられる。アフリカは貧しい、数百万人が飢えているというのは、ひょっとすると真っ赤な嘘なんじゃないかと疑いたくなるぐらいだ。

ドゴン族の土地へ行きたいと思ってマリ大使館に足を運びいろいろ調べてみたが、陸路では行けず、あまりにも多額の費用と日数がかかることがわかり、とりあえず今回はあきらめることにする。

サハラ砂漠の南、ニジェール川湾曲部の岩山に住むドゴン族と、カラハリ砂漠のブッシュマンの存在を知ったときからアフリカに魅せられていたのだった。

いや、最初のきっかけはジャズだった。

バッド・パウエルやジョン・コルトレーンに入れあげた勢いで、アフリカ黒人に憧れ、ドゴン族の創世神話に夢中になってしまったのだ。複雑・精緻をきわめた神話体系の中に、自分の前世のことでも聞かされるような話がいくつも混じっていた。

たとえば人間はかつて性別も何もない完全な一体であったが、意識というやっかいなものをしょい込んでから男と女に分裂し、それ以来、男はかつての半身であった女を、女はかつての半身であった男を生涯探し求めるように運命づけられたのだという。

雨は神の精液である、という言葉にもくらくらっときたのを憶えている。

マサイの男たち。

ドゴン族の次に出会ったのがカラハリ砂漠のブッシュマンだ。友人たちが大学のキャンパスで女の子たちとのびのびやっている頃、早々とドロップアウトして巷で働いていたぼくは、とにかく日本を飛びだすために英語だけは身につけておこうと英国領事館の図書館から『カラハリの失われた世界』という本を一冊かっぱらってきたのだった。惚れた女を拐すような思い入れがあった。独学のつもりで翻訳にも取りかかった。むろん最後までやり遂げることはできなかったが、こんな一節をいまでもはっきり憶えている。

英国人の著者がブッシュマンの老人に出会い、

「このカラハリのブッシュマンの世界とはいったい何なのか？」

と、きわめて抽象的な問いかけをすると老人は即座にこう答えるのだ。

There is a dream,dreaming us.（ここには、我々を夢見ている夢がある）

あとになって大乗仏教をかじり、この世界は波に映る模様のようなもので実在のように見えて実在ではない、世界はいわば虚空のスクリーンに投影されているという華厳経の一節に出会ったとき、とっさに「我々を夢見ている夢がある」という言葉を憶いだし、なんだか奇妙な気分になったものだ。

ドゴン族といい、ブッシュマンといい、西欧的文脈とはまったく別のかたちで、アフリカはひょっとすると途方もなく洗練されているのかもしれない。

アフリカの最小国で

この大陸は途方もなくでかいけれど、地図をよく見ると四国か九州ぐらいの小国家がいくつか存在している。象牙海岸、黄金海岸につづくトーゴはそんな最小国の一つで、ジェット機で飛べば一五分ぐらいで横断できるだろう。

首都のロメ空港で、回教国のどこかからくる国賓を迎えるセレモニーにぶつかり半日近く待たされてしまった。退屈するどころか最高のショーであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com